

氏 名	すぎ もり えり こ 杉 森 絵 里 子
学位(専攻分野)	博 士 (教 育 学)
学 位 記 番 号	教 博 第 56 号
学位授与の日付	平 成 18 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	教 育 学 研 究 科 教 育 科 学 専 攻
学位論文題目	メタ記憶におけるインプット-アウトプットモニタリングエラーの規定 要因

論文調査委員	(主 査) 助教授 楠 見 孝 助教授 齊 藤 智 教授 子 安 増 生
--------	---

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、メタ記憶におけるインプット-アウトプットモニタリングエラーの規定要因について実験的に検討したもので6章、11の実験から構成されている。

第1章“序論”では、従来の研究を展望しその問題点として、第1に、インプットとアウトプットのモニタリングの区別と両者の関連について検討していない点、第2に、エラーをリアリティ判断エラーの結果とのみ考え、時間判断のエラーを考慮していない点を挙げ、これら2つの問題を検討することが本論文の目的であるとしている。

第2章“インプットモニタリングの研究動向と問題点”では、まず、Johnson & Raye (1980)の実験パラダイムについて説明をし、さらに、インプットモニタリングにおけるリアリティ判断の帰属傾向を検討し、外的ソース記憶と内的ソース記憶の記憶痕跡強度と質的属性の違いがモニタリングに影響を及ぼすとしている。

第3章“インプットモニタリングエラーの規定要因”では、2つの主要な問題として、(1)リアリティ判断だけでなく、時間判断の観点からもエラーを扱う点(実験1-3)、(2)各項目を1種類のソースから1回学習させるのではなく、2種類のソースから複数回学習させ、各ソースの影響について検討する点(実験4-6)を挙げている。その結果、実験1-3からは、(1)時間判断において、時間ソース帰属バイアスが8日目にはなくなり、時間ソース記憶がなくなる、(2)リアリティ判断において、時間ソース判断とは異なり8日経過しても“想像した”へのソース帰属バイアスがあることを示している。実験4-6からは、(1)視覚呈示の反復頻度増加は“想像した”の頻度回数判断に影響するが、イメージ生成の反復頻度増加は“見た”の頻度回数判断に影響しない(実験4)、(2)視覚提示による項目の事前反復は、同じ項目をイメージ生成によって学習しても、視覚提示ソースで学習したと誤る傾向がある(実験5-6)、(3)イメージ生成による項目の事前反復は、同じ項目を視覚提示で学習したときのソース判断に影響を及ぼさない(実験5-6)、(4)モニタリング時の判断カテゴリに“分からない”を増やすと“想像した”への帰属率が減ることを示している。

第4章“アウトプットモニタリングの研究動向と問題点”では、まず、標準的な実験パラダイムが確立していないことを指摘した上で、単語記憶テスト、展望的記憶、インプットモニタリングを用いたパラダイムを検討し、新しい実験パラダイムを提案している。その利点は、(1)日常生活における行為を検討するため、材料を行為事象文とした点、(2)実行すべき時に実行できたかどうかについて検討するため、被験者が行なうべき行為事象を学習し、実行し、それが実行できたかをモニタリングさせる点である。

第5章“アウトプットモニタリングエラーの規定要因”では、新しい実験パラダイムを用いて、エラーを引き起こす条件について検討している。そして、(1)学習時の反復実演と実行時の二次課題が、エラーの増加の原因となる(実験7-8)、(2)学習時における実演反復は、記憶情報が多いソースの記憶痕跡を強める(実験9)、(3)実行時の二次課題は、実行時の記憶痕跡を弱くする実験操作である(実験10)、(4)エラーの増加は、学習時において系列学習という認知負荷を減らす学習によって起こること(実験11)を示している。

第6章“総合的考察”では、まずインプット-アウトプットモニタリングエラーの規定要因について11の実験の結果をもとに両モニタリングを統一的に説明するモデルを提案した。そして、両モニタリングエラーの共通点としては、エラーが生じる時に、モニターすべき出来事の事前に起こった出来事が影響すること、相違点は、(1)事前に起こった出来事が、モニターすべき出来事に及ぼす、影響の仕方が異なること、(2)エラーの生起条件として、モニターすべき出来事に二次課題が必要か否かであると述べている。そして最後に、今後行なうべき研究の方向を示している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、メタ記憶におけるインプット-アウトプットの2つのモニタリングエラーに関して、その規定要因を実証的に解明した論文である。それは、工夫された実験パラダイムを用いた11の実験を行い、両モニタリングのエラーを統合的に説明する認知モデルの構築をおこなった先進的な論文である。

その論文の特色は以下の4点である。

- (a) インプットとアウトプットのモニタリングエラーを同時に検討する統合的な視点
- (b) そのために、新しい実験パラダイムを開発した方法論的な新しさ
- (c) リアリティ判断エラーだけでなく、時間判断のエラーを検討した結果のもつ重要性
- (d) 反復エラーや脱落エラーの防止などのヒューマンエラーなど応用研究への示唆

第1章では、従来のソースモニタリング研究の問題点を指摘して、(1)インプットとアウトプットのモニタリングを明確に区別し、(2)モニタリングエラーに関してリアリティ判断エラーだけでなく、時間判断のエラーも同時に検討する重要性を主張したところに、本論文の着眼点の鋭さが見られる。

第2章でインプットモニタリングの研究の動向を批判的に検討した上で、第3章はその規定要因を明らかにする6つの実験をおこない、多くの興味深いデータを示している。とくに、時間判断のソースは、リアリティ判断のための質的ソースに比べて、時間経過によって失われやすく、帰属バイアスのエラーも小さくなるという重要な発見をしている。また、2種類のソースから同じ項目を複数回学習させてソース間の相互作用を検討した結果、事前反復呈示において、視覚呈示はイメージ生成に比べて、頻度回数判断が正確で、事後に同一項目を異なるソースで学習した場合、その後の学習時のソース判断を誤らせる傾向があることを明らかにしている。こうしたソース判断に及ぼす時間判断と事前反復の影響を明らかにしたことは重要な成果である。

第4章ではアウトプットモニタリングの標準的パラダイムが確立していないという問題点を指摘した上で、第5章では、そのエラーの規定要因を明らかにするために、新たなパラダイムによる5つの実験に基づいて、多くの新規なデータを示している。とくに、学習時の反復実演と実行時の二次課題、自動化された系列学習がエラーの増加の原因となることを示している。これらは、アウトプットモニタリングのエラーの規定要因について、事前反復経験、実行時の処理負荷、事後の記憶表象に基づく判断といった一連のプロセスを統合的に検討している点で、メタ記憶研究において重要な意味を持つ。また、ソースモニタリングエラーに起因するヒューマンエラーを防ぐ重要な示唆を導いている。

第6章“総合的考察”において、インプット-アウトプットモニタリングエラーの規定要因について11の実験の結果をもとに両モニタリングを統一的に説明するモデルを提案したことは、ソースモニタリングを統合的にとらえた点で、メタ記憶研究への貢献が大きいと評価できる。

以上のように本論文は、オリジナルな着想に基づき、線画、写真、行為文などの多様な材料と新しく開発した実験パラダイムを駆使して、多くの新たな成果を見出しているが、今後に残された問題として以下の点が指摘できる。

- (a) 従来の記憶理論に関する展望の充実と関連理論との整合的な説明
- (b) 異なる課題や材料を用いたパフォーマンスの背後にあるメカニズムの差異やその共通性の解明
- (c) 記憶情報量、記憶痕跡、干渉などをめぐる議論の必要性
- (d) インプット-アウトプットモニタリングの関連性をめぐるさらなる考察

などである。

しかし、こうした点は、本論文で見出された多くの新しい知見の価値を損なうものではない。

よって本研究は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成18年2月16日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。